

みやもとだより

第10号 平成27年8月発行

季節のおまつり

西馬音内盆踊り

秋田県のJR湯沢駅から少し奥に入った羽後町西馬音内という町には、菅笠を被った踊り子の輪の中に彦三頭巾という目だけを出した黒い覆面の踊り子が入って踊る一風変わった盆踊りがある。

この黒い覆面は農作業での日除けや虫よけのためとか、歌舞伎の黒子が用いる黒覆面からヒントを得たなどの説があるが、篝火のなかで見る踊り手の顔が目を除いて見えないというのもいかにも妖しい雰囲気を醸し出し、亡者を連想させるところから「亡者おどり」ともいわれている。

西馬音内盆踊りは約七百年前に豊作祈願や祖民俗文化財に指定されている。

特に、女性の踊り手が身にまとった「端縫い衣装」は、何種かの絹布を思い思いに配色を考え端縫つたもので、半端な小布も捨てず祖母から母へ、そしてまたその娘へと大切に受け継がれてきたものである。

踊りは優雅で流れるような上方風のもので、主に音頭とがんけ（甚句）がある。また囃子は特設櫓の上で、笛や太鼓、三味線、鉦などで奏せられ、がんけの歌詞には、「踊る姿にや一目でほれた彦三頭巾で顔知らぬ」などと哀調が漂う。他方「音頭」には時勢を唄つたものも多い。それら唄の間合いには「ダカサッサー・ウォー（アソレソレ）」などと入り、どこか異次元の世界に迷い込んだようである。



上) 手絞り藍染の浴衣に彦三頭巾をかぶった踊り子 中) 2階特設櫓で囃子は奏せられる 下) 盆踊り会場

(写真・文 宮本卯之助)

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

縁付き



切り縁仕上げのために、縁を切り取る

その背景の一つに、組太鼓の普及があります。古くから能楽や歌舞伎といった古典芸能やお祭りといった用途に加え、戦後、グループで演奏する組太鼓が盛んになりました。打ち込んで緩んだ皮をもう一度張る「縫め直し」ができる縁付きは、使用頻度の高い組太鼓で好まれるようになりました。ご来店の機会が増えた事で、お客様とも更にご縁のあるお付き合いとなつた訳です。

.

「縫め直し」ができる縁付きは、使用頻度の高い組太鼓で好まれるようになりました。ご来店の機会が増えた事で、お客様とも更にご縁のあるお付き合いとなつた訳です。

蝶々が舞う音

古典芸能へのとびら

鮮やかな羽を広げてヒラヒラと舞う蝶々。美しく優雅な姿は、歌舞伎に度々登場します。明治十年頃よりオルゴールと呼ばれる道具を使って蝶々の効果音が表現されるようになりました。構造はいたってシンプルで、箱型もしくは二字型の木枠に、音階の異なるリングを取り付けられているのみ。洋式のオルゴールに音色が似ていることから、その名が付いたと



隅田川とうろう流し

八月十五日（土）
浅草徒然につき

江戸時代より数々の文化、芸術の舞台となってきた隅田川。現在は辺り一帯に近代的な景色が続きますが、お盆の終わりになると、東京では見る機会の少なくなったとうろう流しが行われています。火を灯した灯籠を海や川に流し、精霊をあの世へお送りする、夏の伝統的な行事です。日が沈む頃、浅草寺一山式衆の読経と三千個ほどの灯籠が流れていく様は、昼間の賑わいとは違った趣です。ご先祖の供養や東日本復興への祈りなど、それぞれの思いを乗せた灯籠が、今年もまた隅田川を流れていきます。

以前訪れたロサンゼルスの寺院の盆踊り。会場に入ると参加者は一人ずつ蠟燭に献灯し、夕暮れに一面の蠟燭灯りが広がり、実に莊厳な雰囲気でした。移民社会であるが故に祖先への感謝の念が強く感じられる一幕は、むしろ原風景を見ているようでした。日本でも伝統行事の本義を忘れずに継承していくかなくてはならないと、改めて教えられました。

元来地域の娯楽として、また絆を強める社会的役割を果たしてきた盆踊り。地域によっては人手不足で中止になってしまいますが、踊りや囃子だけでなく、浴衣や提灯などの日本の風情を幅広く且つ気軽に楽しめる所が人気の由縁でしょうか。

以前訪れたロサンゼルスの寺

院の盆踊り。

.

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-1035 東京都台東区西浅草二十一 電話(03)31384412-2411
	www.miyanoto-unosuke.co.jp
代表取締役社長	宮本芳彦